



## 特別天然記念物

# アホウドリ

### 「アホウドリは絶滅した」

1949年3～4月、アメリカの鳥類学者オースチン博士は、アホウドリの生息が期待されていた島々を調査したが、ついに一羽も発見することはできなかった。これにより、アホウドリは絶滅してしまった可能性が大きいとする論文が発表され、そのニュースは世界中に伝わったのである。

かつて、伊豆諸島の鳥島などには、膨大な数のアホウドリが生息していた。1888年に鳥島を訪れた探検家の服部徹は、その様子を「**実に驚くばかいだ**」と報告している。それがなぜ、絶滅宣言が出るまで減ってしまったのか。それは、人間が良質の羽毛の採取のために大量に殺してしまったからである。1900年ころには鳥島に島民300人が住んで羽毛採取に従事しており、1930年代までに、おそらく**1000万羽ちかく**のアホウドリが殺されたのではないかとわれている。1933年に鳥島が禁漁区になった際には、**数十羽**にまで激減していたのである。

「**アホウドリの再発見**」1951年、中央気象台の鳥島測候所の職員により、ごく少数のアホウドリが発見された。このニュースは大きな喜びをもって迎えられたという。この後、アホウドリはやっと保護されるようになり、1956年に国の天然記念物、1962年には特別天然記念物に指定されることとなった。さらに、1970年代後半に入ると、京都大学に在籍していた長谷川博（現在、東邦大学）がアホウドリの研究を開始し、環境庁と東京都による繁殖地の整備や防砂工事なども行われ、以後、順調に個体数が回復している。この間の経緯は、「風にのれ！アホウドリ」（長谷川博著 フレーベル館）などで紹介されている。

2010年に行われた「第105回アホウドリ繁殖状況調査」では、鳥島全体のアホウドリの総個体数は、**2790羽**になるだろうと予想している。アホウドリはみごとに**復活**したのである。

**佐高所蔵の剥製**は、正確な記録は全く残されていないが、おそらく1900年代から1930年代にかけて鳥島近辺で採取されたものと考えられる。少なくとも、今から80～110年前の剥製である（今回のクリーニングにより当時の色彩が蘇ったのは嬉しい！）学術的に貴重であることはもちろんだが、人間が野生生物に対して行ったことを示す記録としても、忘れてはならないだろう。



父島に荷揚げされたアホウドリの死体（1905年頃）→